



Nagoya City University Academic Repository

学位の種類	博士（人間文化）
報告番号	甲第1588号
学位記番号	第26号
氏名	松野 充貴
授与年月日	平成 29年 3月 24日
学位論文の題名	フーコーにおける歴史的批判
論文審査担当者	主査： 伊藤 恭彦 副査： 別所 良美, 菊地 夏野

博士論文審査及び最終試験結果報告書

平成29年2月9日

審査委員(主査) 伊藤恭彦

名古屋市立大学大学院学則第14条及び名古屋市立大学学位規程第10条に基づき、次のように博士学位論文審査及び最終試験結果を報告します。

- 1 審査委員の補職及び氏名
別紙1のとおり
- 2 審査に係る学位授与申請者及び論文の表題
別紙1のとおり
- 3 学位論文の内容の要旨
- 4 学位論文審査の要旨
別紙2のとおり
- 5 最終試験の結果の要旨又は学力確認の結果の要旨
別紙2のとおり
- 6 学位授与についての意見
別紙2のとおり

(別紙1)

1 審査委員の補職及び氏名

委員区分	補 職 名	氏 名
主査	教授	伊藤恭彦
副査	教授	別所良美
副査	准教授	菊地夏野

* 人間文化研究科教員でない場合は、補職名欄は所属・補職名

2 審査に係る学位授与申請者及び論文の表題

申 請 者	学籍番号	144804
	氏 名	松野充貴
	指導教員	伊藤恭彦
	副指導教員	別所良美
申請に係る 学位論文の表題		フーコーにおける歴史批判

(別紙2)

3 学位論文の内容の要旨

本論文はフランスの思想家・社会学者ミシェル・フーコーの思想を哲学的観点から再解釈するものである。既にフーコーの思想は国内外で様々な観点で考察されてきた。またフーコーが開拓した新しい社会理論を駆使した社会分析も依然として活発である。しかしながら、従来のフーコー論では、フーコー思想の断絶説が通説としての位置を占めていた。すなわち、フーコーの思想活動を前期、中期、後期と区分し、前期は考古学、中期は権力論、後期は自己への配慮を核とした倫理学という形で一貫性のない思想家として断絶的に把握してきた。本研究は、従来の通説的なフーコー像を解体し、思想家＝哲学者フーコーの実像に迫ろうとする意欲的な論文である。前期から後期に至るまでフーコーは一貫した思想的立場にあったことを論証するために、本論文が依拠するのがフーコーとカントの関係である。フーコー理解の通説では、フーコーは近代哲学を徹底的に批判したポスト・モダンの思想家として位置付けられてきた。この位置付けに対しても本論文は異議申し立てをする。すなわち、フーコーは自らの立場をポスト・モダンと明言したことはなく、自らの思想的方法を一貫してカント由来の批判哲学としていた。本論文はこの点からフーコーの思想的立場をカント哲学の継承と位置付け、その視点からフーコー思想の一貫性を描き出そうとする。

本論文は以下の構成をとっている。

序文 歴史的批判——エピステモロジーからフーコーへ

第1章 カントからフーコーへ——批判の経験化と言説化

第2章 医学とその外部——経験の具体的アプリアリ

第3章 事物の秩序——実証性の領野の変動

第4章 批判的思考の三様態——カントからフーコーへ

第5章 戦略・戦術・魂／権力・知・魂——実在する魂とは何か？

終章 考古学と系譜学

序文ではフーコーのカント論である「啓蒙とは何か」が検討される。序文ではフーコーが自らの思想的試みを「批判」の歴史化と位置付けていることがまず確認される。

その上でフーコーが「生命——経験と科学」において検討対象としているエピステモロジー（フランス科学認識論）に着目し、エピステモロジーがフーコーに先立って批判の歴史化という試みを行っていることを解明する。このことから批判の歴史化がフーコーに独創的なものではなく、エピステモロジーに代表されるフランスの哲学的伝統であることが明らかにされる。もっともエピステモロジーは科学を通した歴史的批判であり、フーコーは言説についての批判である点で両者にズレがあることも確認される。

第1章では1961年のフーコーの博士副論文「カントの人間学」の詳細な検討が行われる。フーコーはこの中でカントの『人間学』に焦点をあて、『人間学』の中にカントの第一批判（『純粹理性批判』）の構造が反復されていることを見出していたことが強調される。その上で『人間学』においては言語に特権的な地位が付与されており、カントは言語を通して経験的綜合の形式を探求しているとフーコーが解釈していることを明らかにする。フーコーは1961年の時点で言説を通した批判の可能性をカントから継承したと主張するのである。

第2章では『臨床医学の誕生』が取り上げられる。ここではフーコーの批判が批判の歴史化と言語を通した批判の綜合であること、すなわち言説的—歴史的批判であることが明らかにされる。フーコーは『臨床医学の誕生』を通して批判の三項構造、すなわち実践（感性）、言語（悟性）、ある種の経験的計画（構想力）という三項構造がまなざし、言語、共通構造という三項構造化されて探求されていることが明らかにされる。

第3章では『言葉と物』の第1部が取り上げられる。ここでは特にフーコーの文学論が検討される。フーコーが文学論で活用する「フィクション」という概念が批判の認識論の構造であることが明らかにされる。「フィクション」という概念を導入することで、フーコーは言説の内部に感性の機能を見出すことができたとされる。そしてこの解釈によってフーコーの試みが従来は言説一元論であるかのように理解されていたが、ここにも批判の三項構造、語る主体、語る言説、語る内容という構造が見出される。

第4章では『言葉ともの』の第二部「人間」の解釈と『知の考古学』を対象として考古学がどのようなものなのかを明らかにしようとする。ここでは批判的思考三様態が明らかにされる。カントの批判は表象の結合関係を可能にするものの可能性の条件の探求であり、人間は経験的諸内容に超越論的価値を付与する擬批判であり、新たな

批判が人間の意識の外側にあるものの批判的探求であることが提示される。フーコーは考古学を主客の問題として論じ、感性（受容性）、悟性（自発性）、構想力（媒介項）という三項構造が、対象形式、言表機能、概念形成、戦略形成それぞれの分析の中で不可分の形結びついていることが明らかにされる。つまり考古学とは一つの認識論だとの解釈が示される。従来フーコーは近代の「人間学的眠り」に誘った主犯としてカントを断罪したと解釈されてきたが、以上の検討からフーコーはむしろカントに忠実であり、カント的な視座から近代を批判できたのだと解釈される。

第5章では『監獄の誕生』を中心にフーコーの権力論が検討される。フーコーの権力論の考察は戦略と戦術という観点が一貫しており、それが権力の技術論と呼ばれる。本章ではこの技術論がバシュラールの科学哲学における技術論とアナロジーの関係にあるとの仮説から、フーコーの権力論の再解釈が試みられる。その再解釈を通してフーコーが権力論において探求していたのが客体の生成プロセスであり、真理と権力の有名な主張も戦略—戦術の観点からのものであることが明らかにされる。その結果、真理が戦略の次元に属し、知が戦術の次元に属しているとの主張がされる。『監獄の誕生』の認識方法を分析することで、『監獄の誕生』が客体についての真理の生成プロセスであるとの新たな解釈が得られる。

終章では以上の研究の総括がなされ、特にフーコーの二つの方法として理解されてきた考古学と系譜学の関係が明らかにされる。考古学から系譜学への移行は所与の客体の経験的綜合の形式についての探求から客体が生産されるプロセスの探求への移行と解することができる。とされる。「客体がある」ということから出発して客体の認識の条件を探求するのはなく、客体そのものが生成される過程の探求へと思考へとシフトすること系譜学が成立したのである。フーコー最晩年の主体性や自己自身による自己への関係といった議論も系譜学の自己客体化の延長線上に理解することが可能となる。

4 学位論文審査の要旨

本論文の意義は以下の点にまとめることができる。

第一の意義は前期、中期、後期と立場と方法を次々と変えるポスト・モダンの旗手として理解されてきたフーコー像を大きく修正させた点である。論文ではフーコーがカントの批判哲学の枠組を一貫して維持し、その枠組からの批判という哲学的作業を

遂行してきたことを明らかにした。難解のフーコーの著作から、その認識論の中にあり、カントの認識論と平行な三項構造、すなわち感性（受容性）、悟性（自発性）、構想力（媒介項）が名称を変えながらも一貫して通底していることを、丹念なテキスト読解を通して明らかにした点は特筆に値する。この検討を通して、フーコーがポスト・モダンの思想家であるとの評価も一面的であることも明らかになった。つまり、フーコーはカントに忠実であり、カント的な視点からの批判＝近代批判を遂行していたのである。このように従来のフーコー解釈を大きく修せさせた点に本論文の最大の学術的な価値がある。

第二の意義はフーコーに連なるフランス思想の系譜を明らかにした点である。従来、フーコーは構造主義の系譜で理解され、それを克服する思想家として論じられてきた。しかし、フーコーが自らの思想を立ち上げていくフランス思想界の現場に内在するならば、この種の単純な影響関係が誤りであったことが分かる。本論文の意義はこの点に関わる。フーコーは指導教員のカンギレムを通してエピステモロジーからの深い影響下にあり、自らのそれに連なる思想活動を行っていたことを自覚していたのである。フーコーがカントから継承した批判の歴史化は既にエピステモロジーに連なる研究者達が自らの方法としていたことであり、フーコーはエピステモロジーを経由してもカントからの深い影響下にあった。この点は本論文第5章の権力論分析で鮮やかな分析として結実する。第5章ではフーコーの権力の技術論がエピステモロジーに連なるバシュラールの技術論の受容にあったことを明らかにしたが、これはフーコーとエピステモロジーの関係を解明する重要な思想的発見であると位置付けることができる。我が国はフランスのエピステモロジー研究はあまり行われていない。本研究はフーコー研究の観点からフランスのエピステモロジーの哲学的意義を解明する可能性を拓いたと評価することができる。

以上の2点から本論文の学術的意義は極めて高いと評価することができる。引用は適切に行われていることはソフトを使っても確認した。

5 最終試験の結果の要旨又は学力確認の結果の要旨

最終試験は平成29年2月3日14時30分から名古屋市立大学滝子キャンパス1号館1階会議室で行われた。冒頭、学位授与申請者から、公開セミナー以降に研究が大きく進捗した部分を中心に、論文内容の要旨が報告され、その後、質疑応答が行われた。

質疑応答の中心は以下の内容であった。まず本論文が批判対象としている通俗的な議論が明示されていないことが指摘された。この指摘に対しては、内外のフーコー概念の応用研究はほぼ断絶説にたっており、全てを明示する必要はないこととの応答がされた。またフーコーが「ポスト・モダンの旗手」でないならば、どのような思想家なのかという問いに対しては、カント哲学の忠実な後継者と位置付けることができるとの回答がなされた。論文の内容に関しては、フーコーのカント解釈＝カント受容は見事に描かれているが、それが妥当なカント解釈と言えるのかについての検証が弱いとの指摘がされた。フーコーによるカントの読み方を論文の主要な検討対象としているため、カント解釈の妥当性にまでは踏み込めなかったとの応答があり、その点は今後の研究課題とするとの表明がされた。また、これに関連して、カントとフーコーの超越論的批判と経験的批判の異同についても質された。この点については論文第4章の内容を説明し、両者の重なりと差異について明確な説明をした。最後に論文で提起された問題の深さや新たなフーコー像が鮮明に描ききれず、やや禁欲的な表現に終始しているとの批判があった。この点に関しては論文内容を社会により広く発信していく際に修正したいとの回答があった。

研究発表も質疑応答も申請者は真摯に対応し、本研究での不十分な点と今後の研究課題を自覚していく内容であったと判断した。同時に博士の学位に値する十分な学力と研究能力を有することを審査委員全員で確認した。

6 学位授与についての意見

「学位論文審査の要旨」において述べたように、本論文の学術的意義は極めて高く、日本の通俗的フーコー像を塗り替える可能性をもち、さらにフランス哲学の広い文脈の中でフーコーを理解する途を切り拓いた点で哲学界にもならず社会学理論研究に多大な貢献をなしうる評価することができる。あわせて学位授与申請者は高い専門的学術研究を遂行する力量も有していることも確認できた。

以上の点より審査委員一致して松野充貴の「フーコーにおける歴史批判」は博士学位論文に相応しく、申請者に博士の学位を授与することを妥当と判断した。